研究報告

# 佐賀県のアスパラガス圃場における ミカンキイロアザミウマの優占的発生

佐賀県農業試験研究センター　成富毅誌（なりどみたけし）

## はじめに

ミカンキイロアザミウマ *Frankliniella occidentalis*（Pergande）は，1990 年に国内で初確認され（福田ら，1991），佐賀県では 1994 年に侵入が確認された（佐賀県病害虫防除所，1994）。本種は果樹・野菜・花き類等多くの作物を加害するほか，トマト黄化えそウイルス（Tomato spotted wilt virus, TSWV）などの媒介虫としても重要性が高く，近年も薬剤感受性の低下などに関する多数の報告がある（岡崎ら，2014；猪苗代ら，2018；井村，2018）。

一方，アスパラガス（*Asparagus officinalis* L.）における本種の発生や被害に関する知見はほとんどない。井上ら（2008）は，長崎県内のアスパラガスに寄生するアザミウマ種を同定した際に，一部地域で本種の発生を認めたものの，それらは圃場内に他種と混在する形で低率に確認されたものであり，優占種はネギアザミウマとされた。

このような中，近年，佐賀県のアスパラガス圃場において本種が優占的に発生し，栽培期間をとおして被害を及ぼす事例が認められたため，その概要を報告する。

## I　佐賀県における発生状況

佐賀県におけるアスパラガスは，雨除けハウスによる半促成長期どり栽培（池内，1998）が広く普及している。これは，2 月ころからビニル被覆により保温したハウス内で萌芽する若茎（春芽）を 5 月ころまで収穫した後，一部の地上茎を親茎として立茎し，それらの脇から萌芽してくる若茎（夏芽）を 10 月ころまで収穫する栽培法である。露地栽培で春芽のみを収穫する作型に比べて多収・高収益である一方，アザミウマ類による被害が顕在化しやすいことが問題となってきた。

佐賀県のアスパラガス圃場におけるアザミウマ類の発生種について詳細な報告はないものの，佐賀県農業技術防除センターが行う発生予察調査などから，県内の優占種はネギアザミウマであると認知されてきた。また，長崎県と同様に，佐賀県内の一部地域で少なくとも 2003 年ころにはミカンキイロアザミウマの発生を確認していたものの，当時は調査圃場のごく一部でネギアザミウマおよびヒラズハナアザミウマとともに混在して認められた程度で，特段の被害を及ぼしてはいなかった。ところが近年，当該地域の農家や普及指導員から「他の地域よりもアザミウマが非常に問題だ」という声が多く寄せられるようになった。類縁種の発生も疑われたため，後に佐賀県農業技術防除センターが門司植物防疫所伊万里出張所に同定を依頼したところ，問題となっているのはミカンキイロアザミウマであることが判明した。2019 年時点でまだ詳細な調査はできていないものの，本種の発生圃場は少なくとも 5 圃場確認しており，当該地域内でもさらに限定された区域にスポット的に発生している可能性もある。

## II　被害状況

ミカンキイロアザミウマによる被害は，収穫物である若茎の食害と，出荷物への混入被害が最も大きく，親茎では，擬葉が加害されてかすり状に白化し，同化能力の低下を引き起こす等，加害の様相はネギアザミウマと類似している。ただし，被害度についての比較データはないものの，立茎中の親茎に対する加害により新葉が奇形となったり（図–1），春芽を集中加害して褐変させるなど（図–2），一般的にネギアザミウマではほとんど認められない重度の被害も確認している。

## III　圃場内の優占種調査

ミカンキイロアザミウマの発生を認めた圃場におけるアザミウマ類の優占種を，黄色粘着板（製品名：ホリバー，アリスタライフサイエンス社）により調査した（青色を用いなかったのは，別試験の都合でコナジラミ類を同時調査していたためである）。すなわち，2018 年 3 月 5 日から 10 月 25 日まで，粘着板をハウス内および周辺野外（10 m 圏内）の地上 1.5 m 付近に 2 枚ずつ設置し，

Dominant Occurrence of *Frankliniella occidentalis* in Asparagus Fields in Saga Prefecture.　By Takeshi Naridomi
（キーワード：ミカンキイロアザミウマ，アスパラガス，発生消長，薬剤感受性，佐賀県）

無断転載